

C-61 生活改善運動後の服装界の展望。

文化女大家政 遠藤武 和洋女大家政 ○山本政

目的 昭和40年代の衣生活は、洋装一辺倒とも云える時代を迎えた。この現代の服装界は第二次大戦後、急激に未曾有の発展をなしたのである。然し、それ以前に於て、欧米文化の模倣から衣服改良問題、更に洋装が理論より実行へと進められて来た遠因や誘因があった事は、前回発表した所であるが、こうした被服文化の源流をふまえた上で、更に、戦争が洋装化への媒介者となつて、服装界が大きく変動し成長した世相の経過と伝播の様相を観察し、被服構成学指導への手がかりとしたい。

方法 当時の文献資料(雑誌、新聞、単行本、写真)を通じて、社会、経済の変動と、女子教育の新しい発展活動のプロセスから、洋服にならざるを得なくなつた事情と、戦後の服飾文化の変遷を検討した。

結果 文明開化から鹿鳴館時代までの婦人の洋装は、国策上着用させられた高価な服装で、洋服流行の萌しを見るにとどまつた。明治中期から日常生活全般に亘る改良が叫ばれ、服装改良は和服と如何にすべきかに問題が絞られたが、その結果はさしたる変化さえなかつた。それが大正に入り女子の眩場進出の急増と、アメリカ合理化主義の舶来によつて生活改善運動が起り、これに加えて関東大震災と、白木屋の大火は女性の服装生活を根柢から覆し、洋装へと大転換をはじめた。そればかりか満州事変や支那事変は在野大戦へと拡大していつて、二部式構成の便利さをうえつけた。こんな事があつて、終戦を境にあらゆるものが欧米化する事態となり、民主主義生活の上から働く女性の服装として、洋装は当然の事ながら、和服と主客を転じた。